



夜に舞う、
淡き燐光の白い花びら (Pre.)

夜に舞う、淡き燐光の白い花びら



南風野さきは

ねえ、お願い。きれいなものだけを見せて。

目次

一・ 夜に舞う、淡き燐光の白い花びら 9

二・ 彩華 29

あとがき 47

「望むものは？」

と、王が問うた。

「ならば、ひとつだけ」と。

「其方を継ぐ者に、その者の花を」と、女神は答えた。

夜に舞う、淡き燐光の白い花びら



ヒトの名

靄 【アイ】

綦国王位継承者の少年

緑野 【ミトノ】

花畑の少女

牢獄の男・巖の翁・城壁の男・先代綦王

緋衣の女

水鏡に在る者

緇流 【シリユウ】

祭儀官。緇(クロ)を纏う

モノの名

彩華 【サイカ】

王位継承の儀において継承者が見つけるべきもの

水鏡 【ミズカガミ】

此彼の境であるという大鏡

綦 【キ】

国の名

皚邑 【ガイユウ】

綦の都

輻 【ジ】

国の名

青褐の宵闇と皓の三日月。満ちる大気は冷やややかで、まるやかな風が吹き抜ける。燐光が湧くように咲き誇る花が波立ち、白い花びらが宙を舞う。

そこは、見渡す限りを白い花が埋め尽くす、地平すら知れない花畑だった。

花畑に立ち尽くすのは十三歳ほどの少年。少年の眼の先には、少年と同じ年頃のひとりの少女。肩にかかる髪を風に遊ばせながら、花に埋もれかけている岩に座る少女は月を見上げている。

少年に気づいた少女が可憐に微笑んだ。

「こんばんは。それとも、こんにちは、かな？」

首を傾げるようにして、少女は少年を見つめる。

「あたしは緑野。きみは？」

「靄」

わずかな沈黙の後に名を落とした少年は周囲を見回した。

「ここ、どこだ？」

「解っててここにいるんじゃないの？」

「気がついたらここにいたんだよ」

ふてくされる靄に、緑野は微笑する。

「ここは昔あったところ。今もあるのかもしれないけど、あたしには判らない。」

きみ、綵華を選びに来たんでしよう？」

駆け抜ける風を追うように花々が揺れる。

「きみの前の綦王と成る人が綵華を選びに来たのは、二十年くらい前かな」

靄がわずかに唇を持ち上げた時、突如、一際強い風が吹いた。その風のあまりの鋭さに緑野は目を瞑る。地を撫でて空に駆け抜ける風に衣の袖がはためき、風に摘み取られた花びらが宙に躍った。

緑野が瞼を持ち上げる。誰もいない花畑に、花びらが緩慢に舞い落ちてゆく。深く蒼い闇の夜空に、三日月が鋭く冴えた光を放っていた。



王都は喪に服していた。黒の旗が風にたなびき、綦王の殯を悲哀が彩る。

悼みの黒に染まった王都において、そこには白銀という色彩が満ちていた。水鏡の間と呼ばれる間の最奥。一段高くなっている祭壇が白銀に彩りを撒く。祭壇に降り注ぐように、無数の三連の玉——親指の爪ほどの大きさの透明な玉の上下に、小指の爪ほどの大きさの玉が連なったもの——が極彩の紐によって天井から垂れ下がっていた。極彩を越えた先、眼前の鏡を見上げて少年が呟く。

「何も映っていない？」

本来、鏡とはその前に立つ者の姿を映すものだ。しかし、少年の前に聳え立つ水鏡と呼ばれるそれは、巨大で平坦な円形でしかなかった。

「継承の儀を」

と、祭壇の下に平伏する緇衣の者が声を響かせる。水鏡の間の両端に並ぶ人のかたちをした緇——緇流を束ねるその者が、音を重ねた。

「綦に安寧を、綦に繁栄を。綦王の民に幸いを」

「もし、綵華が見つからなかったらどうする？」

目を細めながら少年は問いを投げた。だが、緇は答えない。冷笑を浮かべ、少年は踵を返す。相對した円形の鏡面に少年は手を添えた。

突如、弾かれたように玉が震え、涼やかな音が鳴り響く。

玉の鳴りがけたたましいものとなり、少年の手のひらが鏡面に沈んだ。水と金属の両方の光沢を備えた流動が少年を呑みこんでゆく。

そして、少年は水鏡に呑まれた。

一瞬にして玉が鳴り止む。

静寂に曝されたのは、白銀の光と色彩の乱舞。そして、居並ぶ緇と平坦な鏡面。少年を呑んだ水鏡は、常と変わらぬ静謐さを、既にその身に纏っていた。



夜に舞う、淡き燐光の白い花びら

著(描) : 南風野さきは

発行 : 片足靴屋/Sheagh sidhe

URL : <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>

(2010年11月14日)

印刷所 : 文伸印刷株式会社 内 コミックモール

※著作権は著者に帰属いたします。

※この物語はフィクションであり、実在の人物・団体・事件等には一切関係ありません。

夜に舞う、淡き燐光の白い花びら(Pre.)

<http://p.booklog.jp/book/36620>

著者：片足靴屋/Sheagh sidhe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/leithbhrogan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36620>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36620>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.